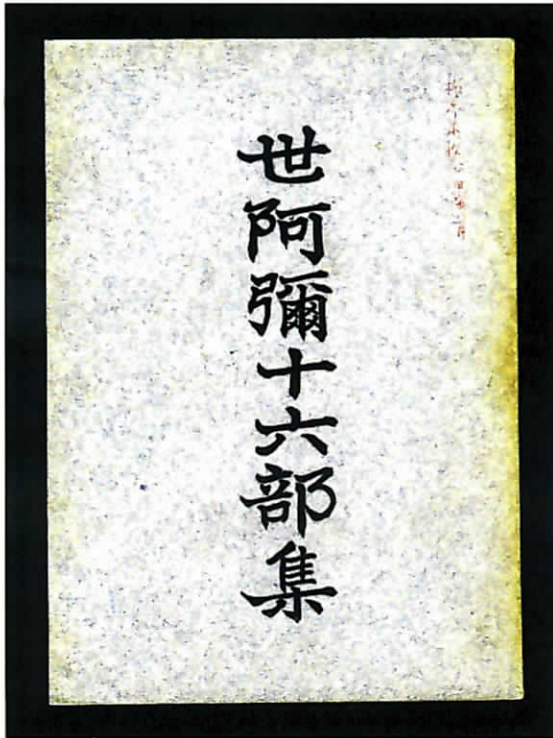


よしだとうご
吉田東伍の

ぜあみほっけん
「世阿弥発見」

2010. 6. 26 佐渡市泉 正法寺

阿賀野市立吉田東伍記念博物館 渡辺史生



▲明治42年（1909年）2月に発行された吉田東伍校註『能楽古典 世阿弥十六部集』の初版（能楽会発行） 別名「吉田本」



▲関東大震災（大正12年9月）による原本（「松廼舎（安田）文庫本」）焼失直前（大正12年3月）に発行されていた『能楽古典 世阿弥十六部集』の第3版（手前緑色の本）

- ・「世阿弥」が世間に知られるようになったのは明治の終わり
- ・原本焼失し「吉田本」（世阿弥十六部集）残される
- ・“発見”のいきさつ
- ・現代佐渡にとっての「金島書」
- ・受け継がれるべき“発見”

吉田東伍が“発見”した世阿弥能楽伝書群

() はその後の研究や新たな伝本の発見により見直された名称

①花伝書 (風姿花伝)

世阿弥が父親阿弥の遺訓をもとに書いた能楽論としての最初の著作

②花伝書別紙口伝 (花伝第七別紙口伝)

処女作の風姿花伝を著わしてから 20 年ほどたって書かれたその続編的口伝。「秘すれば花なり」は本書中の言葉

③五音曲条々

世阿弥が謡の曲趣を祝言・幽曲・恋慕・哀傷・闌曲の 5 種類に分類してそれぞれの特徴を解説

④覚習条々(異端) (花鏡)

世阿弥 40 余歳以後約 20 年ほどの間に体得した芸術論を記す。『花伝書(風姿花伝)』を実践に基づき深化発展させた演技・演出・芸位・批評など広範囲の能楽論。「初心忘るべからず」は本書中の言葉

⑤九位次第 (九位)

能の芸位、修道の順序を 9 段階に分類。各段階に注釈をほどこし論ずる

⑥遊楽習道見風書 (遊楽習道風見)

習道(稽古)の心得、芸の奥義などについて『毛詩』や『論語』、『般若心経』の哲理を援用するなどして論ずる

⑦至花道書 (至花道)

能芸の基本は歌舞二曲と老・女・軍の三体(二曲三体事)であるとし、能の習道法(学習順序)について簡潔に述べる

⑧二曲三体絵図 (二曲三体人形図)

世阿弥の演技論を記す。『至花道書』にある「二曲三体事」を図入りで詳細に説明

⑨能作書 (三道)

能の作り方の指南書。種(人物の選び方)・作(構成のしかた)・書(作詞法)の 3 過程を具体的に説く

⑩曲附書 (曲付次第)

詞に曲をつけるにあたっては音階やアクセントに細心の注意をはらうべきことなど、『能作書』を補完する作曲上の心得を述べた教訓書

⑪風曲集

音曲の道を習うことについての手引

⑫習道書

世阿弥が観世座の面々に心得るべき条々を記し、座衆一同の結束を説いた書

⑬世子六十以後申楽談儀

世阿弥の次男元能が出家するさいに、父世阿弥の芸論を整理・筆録したもの。世阿弥 68 歳以前の芸談の聞き書き。元能自身の記憶や見聞も加えた記録集

⑭夢跡一紙

世阿弥が巡業先で急死した嫡男元雅を追悼、後嗣を失った悲嘆の心境を記す

⑮世子七十以後口伝(却来華) (却来華)

世阿弥最後の芸論書。秘曲「却来風」を元雅へ口伝したが早世。同曲が途絶してしまうことを恐れ、これを書きつけておくが、深く秘すべきものであると述べる

⑯金島集 (金島書)

永享 6 年(1434)、72 歳で佐渡に流された世阿弥が都を出てからの配流の道中、配処の様子など紀行を題材にした 8 編の小謡曲舞集。末尾に永享 8 年(1436) 2 月の日付があり、晩年の世阿弥の佐渡での様子を知る上で貴重

吉田東伍の“世阿弥発見”の経緯（略）

『^{さるがくだんぎ}申楽談儀』（小杉本）の紹介から『^{ぜあみじゅうろくぶしゅう}世阿弥十六部集』を刊行するまで

『^{さるがくだんぎ}申楽談儀』（世阿弥の次男元能が出家するさいに、父世阿弥の芸論を整理・筆録した記録集）の出現が世阿弥伝書（「^{もとよし}世阿弥十六部集」）発見の呼び水に

M41年4月20日
(1908年)

能楽文学研究会で小杉榎邨（こすぎすぎむら）氏所蔵の『世子六十以後申楽談儀』について報告
重要なものであるとして、パンフレット仕様の『世子六十以後申楽談儀 全』を印刷計画する

M41年6月頃か？

安田財閥の安田善之助の個人蔵書である松廼舎文庫に別系統本の「申楽談儀」（柳亭種彦（りゅうていたねひこ）氏旧蔵）が存在することが話題に
吉田東伍、“小杉本”と“種彦本”とを照合、異同をしらべる

M41年7月（初旬か？）

安田善之助（松廼舎文庫）古書店から能楽関連文書一括入手

M41年7月中旬

“種彦本”との異同表が付された吉田東伍校注のパンフレット『世子六十以後申楽談儀 全』を印刷、関係者に配布（非売品）

M41年7月中旬

安田善之助、入手の文書中に「申楽談儀」完本の存在に気づく → 吉田東伍にこの情報伝わる

M41年7月下旬～8月

吉田東伍 早稲田大学地方講演会（新潟県内各地）～歴史地理学会夏期講演会（鎌倉）に出張。のち家事のため一時新潟に滞在。（この間、松廼舎文庫の文書群見ることできず）

M41年8月下旬

松廼舎文庫入手の能楽関連文書を実見
未発見の伝書群であることを確認する

M41年9月～12月

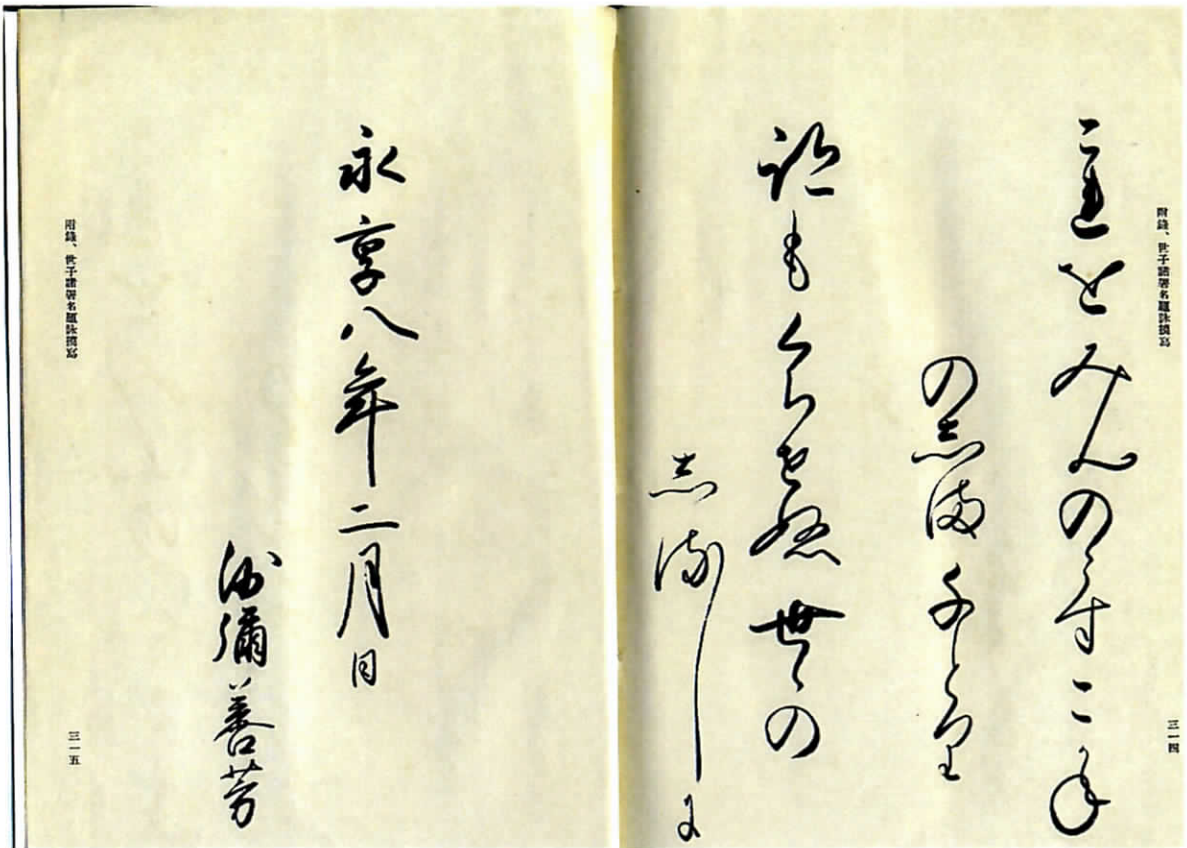
雑誌『能楽』誌上で新発見の16部の伝書について略報告。あわせて出版のための翻字作業を懸命に行う

M41年11月

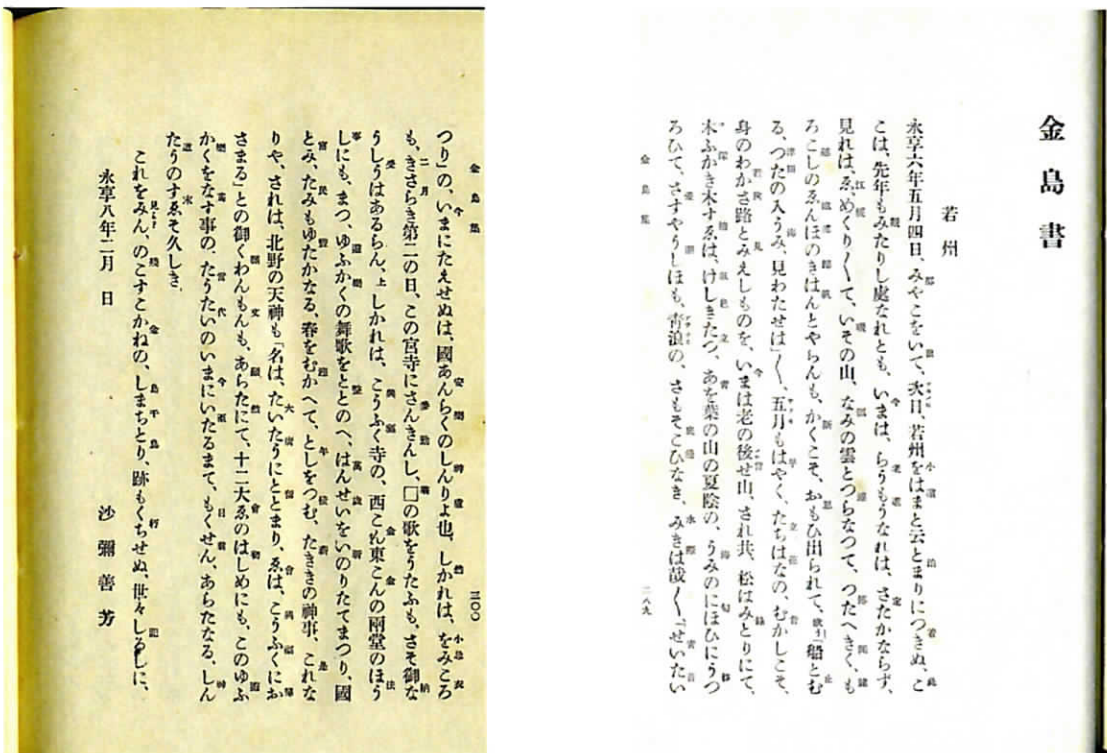
能楽文学研究会で『世阿弥十六部集』印刷内容について評定

M42年2月
(1909年)

『能楽古典 世阿弥十六部集』 初版刊行（500部）



▲『世阿弥十六部集』(吉田本) 巻末に付録された「金島書」の世阿弥の和歌と年記部分の影印
 焼失した「松廼舎文庫(安田)本」の原形がうかがえる資料。署名の「善芳」は世阿弥の法諱



▲『世阿弥十六部集』(吉田本) に所載の「金島書」 首頁(右)と終頁(左)部分
 短期間で翻字作業を行ったためか誤写・誤校と思われる部分もあるが、今日まで「金島書」の
 転写本は他に発見されておらず、本書が唯一底本として扱われている

吉田東伍の「世阿弥発見」

吉田東伍記念博物館の渡辺史生ふみおです。世阿弥ぜあみゆかりの佐渡正法寺しょうぼうじで話をしるということで、いささか緊張していますが、これから『吉田東伍の「世阿弥発見」』という話をさせていただきます。

◎「世阿弥」が世間に知られるようになったのは明治の終わり

広辞苑こうじえんで「世阿弥」の項を引きますと「室町初期の能役者・能作者。…」とありまして、その隣に【世阿弥十六部集じあみじゅうぶしゅう】という項目があります。読んでみましょう。

【世阿弥十六部集】「世阿弥の能楽伝書集。一九〇九年（明治四二年）吉田東伍が集成しゅうせい。その後も遺稿が発見され、二〇部を超えた。能楽の基本的文献。しばしば世阿弥著作集の意に用いる。…」とあります。

吉田東伍という名前が出てきましたが、「誰だそれ」と言われると困るので、ついでに同じ広辞苑で「吉田東伍」を引きましょう。

【吉田東伍】「歴史地理学者。越後生まれ。筆名、落後生らくごせい。独

学で学者となり、早大教授。編著「大日本地名辞書」「倒叙日本史」「世阿弥十六部集」など（一八六四・一九一八）」と書いてあります。

今では、世阿弥の名前は日本を代表する芸術家、芸術思想家として、国の内外に知れわたっているわけですが、実は今から百年前、明治四十二年（一九〇九）以前にこの人物の名前を知っているという人は、一般人の中にはほとんどいませんでした。つまり、明治四十二年の二月に吉田東伍が『能楽古典のうがくこてん 世阿弥十六部集』という本を刊行してはじめて世に知られるようになったんです。

吉田東伍は、元治元年げんじ（一八六四）、今の阿賀野市保田で生まれました。十三歳の時から「学校はわかりきったことしか教えてくれないから行く気がしない」と言って、系統教育を自ら拒否して、まったくの独学で歴史地理学の研究に入っていた人物です。

三十一歳の時から四十三歳になるまで、足掛あしかけ十三年、たった一人で、部屋こむに籠こもって、日本全国の地名、約四万一千か所を収録した『大日本地名辞書だいにほんちめいじしょ』を編ひさんします。これは、わが国初の地名のデータベースと言える辞典で、シリーズで刊行されて、完結までに七年もかかりましたが、明治四十年（一九〇七）

の秋に完成させて人々を仰天させます。

その翌年、明治四十一年（一九〇八）のことです。四十四歳になった彼はまたしても日本の文化史の上で、とてつもなく大きな発見をします。これが「世阿弥発見」です。

東京の銀行財閥、安田家の書庫「松廼舎文庫」の中から、世阿弥の芸術論が記された秘伝書（―これ自体は江戸時代の寛永の頃の写本ですけれども―）を見つけ出して、半年ばかりで読み下し、解読しまして、明治四十二年（一九〇九）の二月に『能楽古典 世阿弥十六部集』という活字本にして発表し、能楽界に衝撃を与えたのです。

つまり、世阿弥という人物が、大変質の高い芸術論をもった役者、舞台作家、演出家、であったこと、その芸術思想家の能楽論の骨組がこの本の出現によって一挙に明らかになった。と、こういうことになるわけです。

この秘伝書群の発見は、その後の能楽の研究に大きな進歩をもたらしたばかりでなく、ジャンルをこえて各方面に大変大きな影響を与えました。芸術論、文学、哲学、教育学などなど、新しい研究が国内外の人々によって、次々と生み出された、ということをみても、まさに日本の文化史上に残る画期的貢献、と言えると思います。

◎ 原本焼失し「吉田本」（世阿弥十六部集）残される

吉田東伍は大正七年（一九一八）、五十三歳で亡くなりますが、その五年後、思いもよらないことが起ります。

大正十二年（一九二三）の九月、彼が発見した安田家の文書の原本が関東大震災で全部、一つ残らず燃えてしまったのです。したがって、原本が焼失してしまつたがゆえに、吉田東伍が活字にした『世阿弥十六部集』だけが残されたことになり、この活字本が能楽関係者や研究者の間で、特別に「吉田本」と呼ばれて「宝典」扱いされていたという話は有名な伝説です。

東伍によるこの「発見」とこの「吉田本」の出版がなければ、おそらく今のような能楽の発展はなかつただろうとまで言われています。

吉田東伍が発見した十六部の伝書の一覧表をプリントしておきましたので後ほどご覧下さい。

ところで、吉田東伍という人物は、実は若い頃、今でいう芸能オタクみたいな所がありまして、歴史的な「歌舞音曲」に興味があつたらしく、二十代前半の頃（まだ地元の小学校で代用教員のようなことをしていた頃ですが）、身近にあつた常磐津の謡本を読み込んで、独自に考証して註解目録のようなノーマでつくっていたことが最近わかりました。

そんな経歴もある東伍ですが、大日本地名辞書を執筆中の四十歳の頃からはかなり突っ込んで日本の古い音曲、歌謡の歴史、今の言いかたで言えば「芸能史」でしょうか、そういった分野に強い関心を示すようになり、本格的に研究しだします。

すこし目を転じて見ますと、明治維新以後、明治の初めは能楽の停滞期でした。

中世から江戸時代の能と言うのは普通「猿楽（申楽）」と呼ばれていました。ご存知のとおり將軍家や諸大名が優遇しておりまして、それがいつしか儀礼用の演劇になって、それぞれの座、流派、家元制度で管理されていきました。

サムライ、町人がみんな謡をやる。やや脱線しますが、明治維新、戊辰戦争の時なんか、官軍の侍が東北地方の幕府軍の侍と交渉をやるんですけれども、お互い自分たちの方言で怒鳴りあうもんだから言葉が通じない。そういう時は「何々何々にて候」といった具合に謡の要領でやるんだそうです。全国の共通言語として謡が用いられていた。謡のリズムは全国统一ですから。そういう効用もあつたらしいです。

長い間、幕府の式楽として猿楽、能は存在したんですけれども明治維新になって、役者はみんな俸禄を失って路頭に迷うこ

とになります。多くの能関係者が転業廃業しなければならぬという大打撃だったんですね。

それで、何とか能を復活させようという運動がおきまして、華族（旧大名や公家ですね）や財閥、皇室、新政府も能楽堂や能楽会を作ったりして能を見直そう、再生しようという機運が出てきます。ただやはり、能を支えるシステム、体制というのは江戸時代とさほど変わっていませんで、問題も多かった。

こうした状況に危機感を抱いた人に池内信嘉という人がいます。俳人の高濱虚子のお兄さんです。この人が中心になってこれは日露戦争の最中になりますが、早稲田大学の高田早苗や坪内逍遙などと一緒に「能楽文学研究会」というのを発足させて、雑誌『能楽』というのを出します。

吉田東伍はこの研究会の第一回目からの熱心な会員でして、明治三十八年（一九〇五）には、能が歴史的にどういうふうに形成されてきたかといった内容の研究発表をし、雑誌『能楽』にも盛んに投稿しています。

注目すべきは、この時点ですでに、他の人があまり注意していなかった観阿弥・世阿弥親子に注目して研究をはじめているという点です。

◎“発見”のいきさつ

吉田東伍が世阿弥の伝書を発見する経緯をすこし詳しくみますと…(レジュメに少しまとめておきましたのでご覧ください)

大仕事の大日本地名辞書を明治四十年(一九〇七)の秋に完結させて、一休みするのかな、と思いましたが、休みません。

翌年の春には先輩歴史学者の小杉楹邨こすぎすぎむらさんが持っていた「申楽談儀」(世阿弥の二男の元能もとよしが出家するさいに父親の世阿弥の芸談を書きとめていたものですが)の写本を分析、書き写して能楽文学研究会で発表します。

東伍は、この本は終りの方が少し欠けているらしいけれども能楽の歴史上、根本史料になる貴重なものだから、埋もれたままではもったいない、ということとこれを簡単なテキスト、パンフレットに印刷しようと思います。

そうしましたら、それと同じような内容の文書が安田財閥あんだざいぼつ(二代目安田善次郎やすだぜんじろう)の蔵書…「松廼舎文庫」にもある、という情報もたらされましたものから、あわてて安田さんの本(これはもともと戯作者げなかくしやの柳亭種彦りゅうていしゅへん氏が持っていた物と言う事ですが)も借り出して、小杉さんから借りた本と照合して、照合表のようなものを巻末につけて印刷、関係者に配布しました。

これが明治四十一年(一九〇八)七月の中頃のことです。

そうこうしていましたら、その前後に、その安田さんが旧大名家の堀ほりさん：堀子爵ほりししやく(信州飯田いいたの堀家)が持っていた能楽関連の文書を大量に手に入れたらしい。しかも、その中には先に東伍がパンフレットにして出した「申楽談儀」さるがくだんぎよりもっと完全な、欠けているところのない写本が含まれているらしい、というニュースが入ります。

ところがあいにく東伍はその七月の下旬から八月の頭にかけて、早稲田大学の地方講演の予定が入っていた。一刻も早く、見たくてしょうがないんだけどキャンセルできない。皮肉なこととその地方講演というのが、新潟県で、新発田、中条、新潟、柏崎、高田、をほぼ三日置きに講演して回るというものです。さらに、お盆の十三日には歴史地理学会の講演で鎌倉に行かないといけない。

吉田東伍はこの頃、どの土地に行っても、その土地について、大変解りやすく格調の高い講演をやる、ということであちこちから指名がかり、引つ張りだこでした。

東伍は、日本全国の地名をまとめた『大日本地名辞書』を、全国どこへも出かけることなしに部屋に籠こもって書いた。それが刊行されたとたんに、お呼びがかり、全国行脚あんぎやしないといけなくなつた訳ですね。

鎌倉へ行った後、また家の用事でいったん新潟へ戻って、東京に帰ったのがこの月（八月）の下旬だったようです。

この間、たぶん、いてもたってもいられなかつただろうと想像しますが、やつと見ることができたんですね。「間違いなくこれまで未発見の秘伝書だ」ということを確認して、読み下し、活字化作業を大急ぎでやって、翌年、明治四十二年（一九〇九）二月には出版。ということになるんです。

先にも言いましたが、この本の出版が転機になって、能楽、能楽史の研究が一気に進んで、その後、世阿弥の直筆本やら、手紙、別系統の伝書なども あいついで発見されました。

だがしかし、です。吉田本「世阿弥十六部集」の最後の伝書、「金島書」。内容は七十二歳で佐渡に流された世阿弥が、都を出てからの道中、立ち寄った所を「題材」にして作った小謡、曲舞が八編。紀行のようなものです。この伝書：「金島書」は吉田東伍が発見し、翻字したこの本以外には見つかっていません。しかも、原本は燃えてしまっておりません。

したがって、世阿弥の絶筆とも言える「金島書」は今日、吉田東伍のこの活字本以外にありませんので、世阿弥の晩年を知るには、この本、すなわち 吉田東伍に頼る 以外にないのであります。

◎現代佐渡にとっての「金島書」

瀬戸内寂聴さんが三年前に世阿弥・佐渡をテーマに小説「秘花」という大作を書き上げられました。

世阿弥の生涯、特に佐渡に流されたあとの晩年の世阿弥に光を当てて、四年かけて書き上げられた、瀬戸内文学の金字塔と呼ばれている小説です。

お読みになった方はご存知と思いますが、この小説、表紙をめくって扉の次に「磯部欣三氏の御霊に捧ぐ」という一行だけ印刷したページがあります。

磯部欣三さんというのは、元佐渡博物館館長の本間寅雄先生のペンネームです。

本間先生がおまとめになられた『世阿弥配流』（平成四年に恒文社という出版社から磯部欣三の名で出版されておりますが）：吉田本の「金島書」をもとに、佐渡島内をつぶさに現地調査して、世阿弥の足跡を丹念に検証された画期的研究です。私は「金島書」の実証的研究は、今のところ磯部欣三氏の『世阿弥配流』が最高峰だと思っています。

この研究成果が寂聴さんの小説のベースになっています。寂聴さんは、最大限の敬意を表し、御霊に捧ぐという一ページを挿入したんですね。

寂聴さんご自身も本間先生の研究を手掛かりに「金島書」に沿って資料を集め、佐渡で取材されております。

残念ながら、平成十八年（二〇〇六）一月に、本間先生は七十九歳でガンでお亡くなりになりましたけれども、翌年行われました本間先生の追悼の集いで、寂聴さんは「本間先生の研究がなければこの小説は書けなかった」そうおっしゃいました。

一〇一年前の吉田東伍の『世阿弥十六部集』『金島書』の発見がなければ、本間先生の研究もなかったでしょうし、それをもとにした寂聴さんの小説もない。

世阿弥の佐渡配流自体、たんなる言い伝え、もしかしたらその言い伝えすら『おぼろ』になっていた可能性があります。

と、ここまでお話をしてくいて、今、正法寺様しょうぼうじで話をしておりますので、どうしても一言ふれておかなければならないことがあります。

このことは本間先生も『世阿弥配流』の中でふれられておられるのですが、「吉田本」が明治四十二年に発行される遥はるか以前に、世阿弥の名前と絡からめて、腰掛こしかけ石伝説や雨乞あまごいの鬼の面が伝わっているのはなぜだろう、ということなのです。

また、以前から島内にたくさん存在する能舞台のうぶたい。能がこの島でこんなに盛り上がっているのはなぜか、これまでは単純に世

阿弥とは直接関係のない発展の仕方をしてきた（江戸時代以後の導入、発展）という見方で解釈してきたけれども、本当にそれだけでよいのか。此処こゝに来て新しい疑問が提起されています。世阿弥は「金島書」の最後に「これを見ん、のこすこがねの、島ちどり、跡も朽くちせぬ、世々のしるしに」と書いて、以後消息を絶ってしまいました。

本当に赦ゆるされて都に帰ったのだろうか。赦されたとしても佐渡で生涯を終えたのではないだろうか。『墓』はどこか。これは百年前からの謎ですが、未だに謎のままです。

◎受け継がれるべき“発見”

吉田東伍は大正七年（一九一八）に亡くなりましたが、その九年前の「世阿弥発見」がその後、世の中にどう影響をもたらしたか、本人は知ることなしに逝ゆきました。もちろん今自分の出した本が「吉田本」などと呼ばれていることは想像もできなかった訳です。

『世阿弥十六部集』の初版本は五〇〇部刷られましたが、最初は全然売れなかったそうです。

東伍が生きている時、ある場所で古本の売り立て会が開かれた。そうしたら三冊、『世阿弥十六部集』が並んでいて、誰も買

わない。たまたま東伍がそこへ来て、「こんなところへ出して、もつたいない」と言つて、自分で三冊買って帰つたと言うんですね。

東伍が死んだ時に、再版本が出されたのですが、この時もさほどの数出ない。震災の数カ月前に第三版が出ていますが、ようやくこのころになって、世阿弥という人物がインテリ層を中心にじわじわ浸透しんとうし始めた。

その後、昭和二年（一九二七）に岩波文庫のシリーズに「花か伝書でんしょ」（風姿花伝ふうしかでん）が入つて、急に、世間が「世阿弥」「世阿弥」と言い出した。実際には本当の発見から二〇年経たつてるんです。

今でこそ、『世阿弥発見』百周年ひゃくねんなど大評価されていますが、吉田東伍の『世阿弥発見』せあまひはつけんというのはこのように、何か一撃で社会にインパクトを与えて消える「打ち上げ花火」のような発見ではなかったのです。

むしろ百年後、二百年後の日本文化のクオリティにも大きな影響力を与え続ける、「燃え尽つきることのない かがり火」のような発見でした。

世界文化の視点からみても二〇〇一年にユネスコが世界無形文化遺産に「能」を登録指定したことをとってみても、実にインターナショナルな発見だったと思います。

ですから、わたしたちがこの発見の意義をさらに高めるよう努力しないとイケないと思うのです。

特に「金島書」の地元の私達が、研究の掘り下げを行う必要があります。謎を謎のままにしておいたんでは、せつかくの百年前の東伍の『世阿弥発見』に申しわけないですね。

時間がまいりました。どうもありがとうございました。

※本稿は、二〇一〇年六月二十六日 佐渡市泉正法寺で行われた「正法寺ろうそく能」での講演『吉田東伍と「世阿弥発見」』（講師・阿賀野市立吉田東伍記念博物館 館長 渡辺史生）の講演録です。